

# 東欧諸国の街かどで

文・山田 眞知子

以前、本誌にグラナダからヘルシンキまでの旅とイスタンブールの旅行について書かせていただいたが（二〇一〇年七月号、二〇一一年五月号）、今回また旅行記を書きませんかとお誘いをうけた。そこで、本年二月にチェコのプラハに行く機会があつたので、今回はチェコを中心に、いくつかの東欧諸国への旅の感想を書いてみようと思う。これらの国々を東欧諸国とひとまとめにするのは無理があるかもしれない。旧社会主義諸国といえよいだろうか。それらの国々を旅行したといっても、正確には主に首都を見学しただけの中にはスロヴァキアのように一日滞在しただけの国もある。

これらの国の首都には、何と表現すべきかわからないが、独特の魅力がある。繁栄と抑圧の歴史の影が街に刻まれていて、街全体は美しいのだけれど、どこか哀愁に満ちている。そして、それは旧市街（オールドタウン）に顕著である。ヨーロッパの歴史のある都市には旧市街と呼ばれる地域がある。だいたい王宮、市庁舎、主教会とその周辺の広場を中心として、そこから街が発達してきた。そこを旧市街と呼ぶのだが、東欧のまちにはその魅力がふんだんにある。

## ◇ 初めての東欧はソ連

私が初めて訪れた東欧の国は、旧ソヴィエト連邦である。一九七〇年代に横浜からナホトカまで

船で行き、ハバロフスクから飛行機で、モスクワ経由でフィンランドに帰った経験がある。それが一番安いルートだったからだ。また、ソ連のアイルフロート機に乗ってモスクワ経由で日本を往復したことも一度ある。しかし、これらの旅はただ目的地に向かうために通過しただけに過ぎないの  
で、旅行ではあつても、現地に足を踏み入れたとはいいがたいし、観光したわけではない。そのころのソ連では、通過旅行者には観光は許されなかつた。ホテルからも外出は禁止だつた。

その後、一九七〇年代にフィンランドに住むようになつてから、当時レニングラードとよばれていた現在のサンクト・ペテルブルグには何回か訪れたことがある。ルートはいつもヘルシンキ駅から出発する恐ろしく古いロシアの列車を使ったグループ旅行であつた。旧ソ連時代なので、国境の警備がきびしく、特に帰りの列車内の検査は徹底していた。憲兵が乗り込んできて、荷物はもちろん、私たちの座っている座席の中まで脱走者がいないかどうか調べられた。ホテルでも監視があつた。私たち外国人は、現地での買い物やペリョースカと呼ばれる外国人用ショップですることができたが、一般のソ連人は入ることができなかった。しかし、このような時代はもう遠い昔である。

ソ連の社会主義体制が崩壊し、ロシア共和国となつた一九九〇年代に入ると、それまでの出国制限がなくなり、反対にロシア人がフィンランドに旅行するようになった。これにもフィンランドに

とって好ましい面と好ましくない面の両方があるのだが、大きな経済効果があることは確かだ。今日では、東フィンランド地方はロシア人が休暇をリゾートで過ごし、ショッピングを楽しむところになっている。ロシア人はフィンランドの別荘地も買っているという。これらの東部地方ではロシア人とのビジネス関係が経済的に重要である。そのため、フィンランドの学校では英語とスウェーデン語が必修であるのだが、東部では、スウェーデン語よりもロシア語を第二外国語として選択できるようにしてほしいという声も出ているようだ。

### ◇ 気軽に行けるエストニア

フィンランド人が気軽に行く外国はエストニアとスウェーデンだ。特にエストニア人はフィンランド人と親戚にあたる民族で、言語がよく似ている。しかし、民族の歴史は異なり、フィンランドは独立を守ることができたが、彼らの運命は、他のバルト諸国とともにソ連に併合されてしまうという過酷なものであった。

今日、フィンランド人にとって、エストニアはフィンランド国内旅行より安く気軽に行けるところである。高速艇フェリーに乗れば首都のタリンまで約一時間半、普通のフェリーでも三〜四時間で船賃は二〇〜三〇ユーロ（二〇〇〇〜三〇〇〇円）とても安い。日帰りも可能で、物価はヘルシンキより安いし、特にアルコール税が安いから、

フィンランド人はエストニアへ買い出しに出かける。私も、首都タリンの旧市街の散策を楽しむ気軽な日帰りの旅を何回か経験している。それに加えて、二〇〇八年の夏の終わりに、「エストニアの館めぐり」というヘルシンキ市民団体の企画する旅に参加した。元博物館学芸員の案内でエストニア国内をバスで回り、館ホテルに泊まり、歴史について学ぶ旅だった。

エストニアは手入れのされた田園と自然の美しい国だ。数多くある館はソ連時代に多数が破壊され、放棄されて荒れ果ててしまったそうだが、独



エストニアの館の庭園

立後は修復作業が行われている。これらはもともとドイツやデンマーク、スウェーデン系の領主（地主）のものだったが、持ち主は一九一八年の独立前後の政変時にエストニアから出て行った。一九九一年の独立回復後、もとの領主の子孫に土地と館の返還を主張する権利が与えられたそうだが、いまさら先祖の土地に戻りたいと思う人は少なかったのだろう。ほとんどの子孫が戻ってこなかったという。現在、館は博物館やホテル、レストラン、学校などに使われている。

私が訪れた館の中には、大きな建物の半分がかなり荒れていた館もあった。フィンランドに移った子孫の一人が権利を主張して手に入れたものの、広大な土地と館を維持することができず売りに出されているのだ、という説明があった。エストニアの田園や古い館のたたずまいがとてもきれいなので、もっと観光をアピールして、日本からも観光客が来るようになればいいのにと、思った。

### ◇ アドリア海の真珠

クロアチアの南ダルマチア地方の都市であるドブロヴニクは、「アドリア海の真珠」とか「この世の天国」と呼ばれるように、掛け値なしに目を見張るほど美しい街だ。ヨーロッパの王侯や貴族がバカンスを過ごすところであった。もともとは七世紀にローマ帝国の都市が滅びた後に建設された都市のようだ。この都市も城壁に囲まれて、地



ドブロヴニクの城壁から地中海を望む

中海沿岸にある。

私が訪れたのは二〇〇九年の四月だったが、幸いなことに気候に恵まれ、この都市を囲む地中海はひたすら青く、街はごみ一つないように手入れがされていた。一九九一年から一九九五年までクロアチア紛争が続く、街の七割が破壊されたと聞いていたので、どのようになっているかと懸念していたが、ユネスコの援助で五年で復興されたガイドは言っていたし、戦禍の跡は目につかなかった。ダルマチア地方は、クロアチアの中でもヴェネチアの支配が続いたところだそうだ。

一八一五年のウィーン会議の結果、他の地方と同様にオーストリア帝国領となったので、クロアチアの中でも異色だと聞いた。

ドブロヴニクに到着後、すぐ城壁に取り囲まれた街を歩いてみた。城壁の上も小額の入場料で歩ける観光名所になっていて、そこからの眺めがすばらしい。中心部から離れると、入り組んだ裏路地に沿って家がある。日曜日だったので、多数の家族らしきクロアチア人が、大人も子供も全員、黒の正装をして、グループでカソリック教会から街中を歩いて家路につくところだった。彼らの黒い髪、白い肌に黒いスーツと白いシャツがピシッとしまっていた。北欧では普通に教会に行くにもそれほど正装にこだわらないし、日曜日に教会に行く人も少ないので、宗教に関する文化の違いなのだろう。

その後、ダルマチア地方の田舎のツアーに参加したが、一世紀前といわれても違和感がないほどとてもどかな田園風景で、ヤギを連れた人が道を歩いていた。昔ながらにロバに白をひかせてオリブを絞っている農家の作業を見ることができたうえ、オリブや生ハムでもてなされた。

この地方には岩塩坑があったという。無知をさらけ出すようだが、塩は海水から作るものだと思っていたので、岩塩坑というのは思いもかけなかった。日本に岩塩を掘る採掘場はあるのだろうか。一昔前のことだが、塩はとても貴重なものだったそう、1kgの塩が1kgの金の価値があったと

いう。信じられない話だが、本当にそうだったのなら、タイムマシーンで物々交換に行きたいくらいだ。旧ユーゴスラヴィア連邦から分離独立した国々の中で、これまでに行く機会があったのはクロアチアだけである。スロヴェニアも美しいという。私たちの住んでいるマンションの管理人は、コソヴォからの戦火を避けてフィンランドに移民となってきた人で、時々故郷の話をしてくれる。彼はマザー・テレサを我々の誇りだと話していた。今後はぜひ他の旧ユーゴスラヴィアの国にも行ってみたいと思う。

#### ◇ チェコとプラハ

初めてチェコを訪れたのは二〇〇九年の一月。飛行機でプラハに入り、そこで二泊し、その後チェスキー・クルムロフを経て、ドイツのパツソーからドナウ川を旅する船に乗った。それからウィーンを経てスロヴァキアの首都のブラチスラヴァに寄ってブダペストに行き、飛行機でヘルシンキへ戻った。この船旅は東京から来てくれた大学時代の親友と一緒にだった。

このツアーは観光付きなので、どこでも現地人のガイドから流暢なフィンランド語で詳しい説明を受けた。プラハはヨーロッパでもっとも美しい都市の一つといえるだろう。かつて神聖ローマ帝国の首都でもあり、「塔の都市」といわれるくらい、多くの塔がある。日本人にはスメタナのモルダウ

川としてなじみ深いウルタヴァ川をはさんで、城と小地区と旧市街に分かれる。このツアーでは、はじめに王宮、金属職人が住んでいたといわれる黄金の小道、聖ヴィート大聖堂、ストラホヴィ修道院などを見学し、それからウルタヴァ川の対岸にある、旧市庁舎や、宗教改革者であり火刑で殺されたヤン・フスの銅像のある旧市街広場を見た。

ガイドのチェコ人の女性に「日本人は私たちの国についてどんなことを知っていますか」と聞かれた。「ブラハの春、ビロード革命、ヤン・フス、エミール・ザトペック、フランツ・カフカ、エゴン・シーレ、トブチエク書記、ハヴェル大統領」と思いつく限りを答え、何とか合格したようだ。そして、「東京オリンピックのチャスラフスカ夫人はため息が出るほど美しかった」と付け加えた。そうしたら「チャスラフスカ夫人は家族内の悲劇があつて精神的打撃を受け、現在療養ホームに入っているのですよ。本当にお気の毒なことですよ」と言われた。しかし、二〇一一年に彼女が日本の有志によって招かれて来日したという新聞記事を読み、載っていた写真を見ると、往年と変わらぬ美しさであったので、障害を克服されたのだろうかとう安心したのだった。

#### ◇ 中世の小都市チエスキー・クルムロフ

この後、旅はブラハから南へ一八〇km離れ、オーストリアとの国境近くにあるチエスキー・クルム

ロフに向かった。S字型に流れるウルタヴァ川は、この都市の旧市街を取り囲んで流れている。一三世紀から一八世紀にかけて拡張された城を中心とした街並みは、そのまま中世が残っているような美しさで、感嘆する。

幸い自由時間があつたので、二八歳の若さで亡くなったエゴン・シーレの文化センターに行き、彼の絵を堪能した。彼は母親の出身地であるこの街をこよなく愛したそうだが、描いた絵があまりにも前衛的ということで、追い出されるようにここから去らざるを得なかったそうだ。

スコットランド出身の作家A・J・クローニン は、『城塞』や『星は地上を見ている』などの著書で知られているが、私は、彼の作品の中では、不遇のうちに死んだ画家をモデルとした『美の十字架』が特に好きで、その小説の主人公とシーレが重なって見えるのだ。

#### ◇ 極寒のブラハ、美味しい食事

再びブラハを訪れたのは今年の二月である。三泊の旅だった。

出発日はそれまで零下二〇℃近かったヘルシンの気温が上がり、零下五℃となっていた。ところが、飛行機の機長のアナウンスでは「目的地ブラハは零下一九℃です」という。ブラハに着くと、ものすごく寒いが晴天で、雪は降っていないかった。次の日は大雪となつて、より寒く零下二〇℃近かつたと思う。私は毛皮を着てきてよかつたと思つたが、街の人たちでそのような格好をしている人は見かけず、私の眼にはかなり薄着に映つた。今回は車いすの息子と一緒にだったので、あまり遠出はせず、旧市街と有名なカレル橋を見て、ヴァーツラフ広場の大通り近辺で食事をした。



ブラハの旧市街広場にて

チェコ料理は肉料理が中心。さすがは王国の首都、とても美味しくて、ヘルシンキの半分程度の値段で十分に食べることができた。広場の屋台で売っているホットドッグを食べれば二〇〇円で食事ができる。寿司や中華料理の店もあったので、一度は寿司を食べてみようということになり、チェコ銀行の並びのとてもきれいなお店に入った。チェコ人が握っていたようだが、タイやヒラメもメニューにあり、これもヘルシンキの半額の料金だった。私には東欧諸国の食べ物ほどの国も美味しかった。

### ◇ プラハのユダヤ人地区とフランツ・カフカ

東欧とユダヤ人居住区は切り離せない。プラハの中心にもユダヤ人居住地区があり、かつては独立したユダヤ人街を築いていたという。ユダヤ人は歴史的に商業において主要な地位を占めており、ボヘミア地方にはじめに移住したのはローマ帝国時代だと言われている。エルサレムと並んで、プラハはユダヤ人の伝統にとって重要な地位を占めるといわれている。プラハ城は八八〇年以降にその基礎が築かれたというが、一〇世紀になるとユダヤ人商人がビザンチン帝国から移住し、城下に居住するようになった。一二世紀にはユダヤ地区はキリスト教地区から区別され、旧市街に壁で囲まれ、夜間は門が閉じられたという。ゲットー

と呼ばれるユダヤ人地区では自治が認められたが、同時に君主の直轄地であった。プラハの偽政者のユダヤ人に対する扱いは他の国ほど過酷ではなかった、と歴史書に書いてはあるが、過酷であることには変わりなく、十字軍、飢饉、伝染病、狂信的な宗教者が現れた時に差別され虐げられるのは彼らだった。

最も有名なプラハ出身のユダヤ人はフランツ・カフカだろう。プラハには彼の名前をとった通りがあり、博物館もある。カフカにちなむ通りや建物を回るというツアーもあった。実は私は彼の作品は若いころに『変身』しか読んでことがなく、しかもドイツの作家だと思っていたように、彼の文学作品についてはほとんど無知である。しかし今回、チェコが誇る作家なのだということがよくわかったので、読んでみようと思う。

私は若いころに、カフカの恋人の一人といわれるメレナ・イエセンスカ（ミレナと書かれているが、メレナが言語に近いようだ）について書かれたものを読んだことがあり、彼女の人間としての心映えの高さと逆境に置かれたときの精神の強さに感動した記憶がある。この女性はチェコのジャーナリストで、ドイツ語で書かれたカフカの作品を初めての外国語、つまりチェコ語に訳したのがきっかけで、恋人となった。二人の関係は長く続かなかつたようだが、メレナは彼という人間の本质を「生きるのには賢すぎ、戦うには弱すぎた」と表現したといわれ、カフカのこの上ない

理解者だったようだ。ナチス統制下のプラハでメレナは多くのユダヤ人の逃亡を助けたが、自分はチェコから亡命しようとせず、ナチスに逮捕されて強制収容所に送られ、そこでも多くの人を精神的に助け、病死したという。カフカは時代の悪化を見る前に、結核で四一歳の生涯を閉じたが、彼の三人の姉妹たちは全員強制収容所で殺されている。

### ◇ ペトル少年とプラハ日記

プラハにペトル・ギンズという少年がいた。彼は父がユダヤ人、母がチェコ人のチェコ系ユダヤ人として一九二六年に生まれた。ユダヤ人として抑圧された生活を送り、一四歳でテレジーンの強制収容所に送られ、一六歳でアウシュヴィッツに移送されて殺された。オランダで隠れ家に一家で暮らし、密告されて強制収容所に送られて死んだアンネ・フランクが残した『アンネの日記』は世界的に有名だが、ペトル少年も日記を残していた。ペトルの日記は思いがけない出来事から発見されたそうだ。

二〇〇三年にスペースシャトル・コロムビア号のイスラエル出身の乗組員であったイラン・ラモン氏が、宇宙にホロコーストのシンボルを持っていくこうとして、エルサレムのホロコースト（ヤド・ヴァシエム）博物館を訪れ、そこに展示されていたペトルの絵を選んだ。しかし、コロムビア号の航海は悲劇に終わって、ラモン氏も亡くなった。

このコロンビア号とペトルの悲劇的な運命を扱ったテレビ番組が放映されたときに、ペトルの日記と絵画作品がプラハのある古い家で発見された。六〇年経って公開された彼の日記は『プラハ日記 アウシュヴィッツに消えたペトル少年の記録』として、ホロコーストを生き延びることのできた彼の妹のハヴァ・プレスブルゲルによって編集され、日本語訳は平凡社から出版されている。

アンネ・フランクと同じように、ペトル少年が聡明な強い心の持ち主であり、迫害の状況下にあつて最後まで心の透明さを失わず、知識欲と探究心を満たしつつ生きたことがわかる。アンネもそうだが、彼が若くして命を絶たれたことはその後の世の中にとって大きな損失だったと思わせる少年であつた。彼らの日記は、ホロコースト、ひとつの民族を計画的に消滅させる体制がどのようなものだったかを私たちに知らせてくれる。今回ペトル少年の視点でプラハを歩いてみた。

ナチスの強制収容所は、これまで私はドイツのダッハウの収容所を見ただけである。ホロコーストの歴史を博物館として残してあるのだが、その印象はまさしく人間を抹殺し始末するところであつた。五〇年経った後でも死の匂いに満ちていた。

## ◇ ショパンのポーランド

ポーランドにはエストニアの時と同じNPOが主催したツアーで二〇〇九年の一二月に訪れ、ワ

ルシャワ、チェンストホヴァ、クラコヴァを回った。ワルシャワの旧市街は広く、歩いていて迷子になってしまったくらいだ。ホテルはショパンの心臓を納めてある教会の近くであつたが、残念ながらその教会は開いていなかった。ポーランド人はショパンを大変誇りに思っている。ショパンはパリに滞在中にポーランド国が分割されてしまい、帰国することが許されなかつたので、心臓を故国へ持ち帰ることを遺言したそうだ。

そういえば、フランシスコ・ザビエルもインドで亡くなつたが、手がイタリアのイエズス派の教会に納められていると聞いた。確かに日本人も遺灰とか髪を残すことはあるが、遺体の一部を切り取つて残すのは少々異様な気がする。私が日本人だからなのだろうか。望郷の念がそれほど強いということなのだろうか。

話がそれるが、亡骸に関する感覚もだいぶ違うようだ。以前、妹と訪れたウィーンのある教会でのことである。ハプスブルク家の昔の墓所といわれる部屋があるというので、地下の扉を開けてもらい階段を下りて、その部屋を見学したことがあつた。薄暗い地下室には一面に古い木のお棺が並べられてあり、そのいくつかは開けられていて、一つにはミイラ化した女性の遺体が入っているのが見えた。その不気味さにもみこまれ見ているうちに、気がついたら私と妹の二人しか地下にはいなかった。閉じ込められるのではという恐怖からあわてて階段を駆け上がった記憶がある。イタリアでもミイ

ラ化した高位の宗教者を安置してあるのを見たし、地下に降りたら元修行僧だったといわれる骸骨が山のように積んである寺院があつた。マリア・テレジアの金属でできたお棺にも華やかな飾りの中にしゃれこうべが飾られている。ただの私的な感想にすぎないが、当時のカソリックの人たちは私たちと異なつた死生観を持っていたに違いない。

## ◇ クラコヴァのユダヤ人地区と岩塩坑

クラコヴァは、ポーランドの京都ともいうべ



クラコヴァの広場にある「ユダヤ人の椅子」

き旧い美しい市で、クリスマス市が開かれていた。クラコヴァにもユダヤ人地区があり、その中のある広場には椅子が並べてあった。その地区から強制収容所に移送されて、帰って来ることのなかった人たちを悼むことを忘れまいとするためだという。

S・スピルバーグ監督の映画『シンドラーのリスト』のロケもユダヤ人地区で行われたようだ。シンドラー氏の自宅と工場の跡も、外部からだが見学することができた。シンドラー氏の晩年は、ユダヤ人を助け反ドイツ的な行為をしたということでビジネスがうまくいかず、生活に困ったそう。しかし、彼が命を救ったユダヤ人が彼の生活を援助したのだとポーランド人のガイドから説明があった。日本で事故があつて注目を浴びたシンドラーという世界でも有数のエレベーター会社があるが、それももとはシンドラー氏が起業したもののらしい。

クラコヴァの郊外にあるヴィエリチカ岩塩坑は、ヨーロッパで最も古い塩の発掘鉱ということ、七〇〇年の歴史のある見事なものだった。一九七八年にユネスコの世界遺産になっている。約一三五層の深さまで降りて、三〇あまりの部屋を見学したが、塩で築かれたチャペルがあり、塩の柱、岩塩に彫られたマリア像などの彫刻、シャンデリア、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』を模したものであった。私たちが見学した日は岩塩坑で働く人たちの忘年会の日で、地下深くの岩塩を採掘してできたホールで宴会が行わ



岩塩の彫刻のマリア像

れるとのことだった。

クラコヴァでは、今はイベント会場になっている貴族の館で、シヨパンのピアノコンサートを楽しむことができた。ピアニストはポーランド人の若い女性で、音大の学生だという。一日遅かったら日本人のピアニストの番だったと聞き、ちょっと残念だった。

#### ◇ 独立の尊さ

ポーランドの旅で、私たちフィンランド人のグ

ループは、クラコヴァのコンサート館で、一二月六日のフィンランドの独立記念日をシャンペンで乾杯して祝った。

独立ということがどのように困難で、貴重なことであるかについては、東欧の国のガイドの人たちが皆、強調していた。ポーランドの女性は彼らの苦難の歴史を熱心に語ってくれたし、チェコのガイドは「私たちはこれまで他の国が私たちの運命を決めることに慣れてきた。でもこれからは変わらなければならない」と語った。スロヴァキアの首都ブラチスラヴァのガイドは「私たちはチェコの人たちとそれほど仲が悪かったわけではない。二つの国に分離したのは政治家が決めたこと」と言っていた。二〇〇〇年に初めてブタペストに一週間旅行した時、観光をお願いしたタクシーの運転手は「ブダペストはともきれいな街なのですよ。EUに加盟したら資金が入ってきて、街を修復して磨くからまた来てくださいよ」と言っていた。どこでも独立後、政治体制の変化の後の国の発展を願っていたし、EUに対する期待も大きかった。

私は東欧の歴史をあまり知らなかったが、今回のプラハの旅を機会に、東欧への理解を深めたいと思っている。東欧の都市はそれほど美しさと哀愁にみちた激動の歴史が刻まれた街なのである。

へやまだ まちこ・社団法人北海道地方自治研究所専門研究員